

本書は一九八九（平成元）年三月十四日から十七日までの四日間、京都（都ホテル新館）で開催された第二回国際研究集会（公開講演会・シンポジウム）の報告書である。

日本文化を国際的・学際的・総合的に研究することを目的として設立された国際日本文化研究センターでは、共同研究の成果が出てくるまでの、最初の三年間、「世界の中の日本」という総合テーマのもと、つぎのような年度別のテーマを立て、国際集会を開くこととした。

一九八八年 日本研究のパラダイム——日本学と日本研究——

一九八九年 対象と方法——各専門から見た日本研究の問題点——

一九九〇年 文化研究という視点——日本研究の総合化について——

今年の場合、参加者に配布した趣旨はつぎのごとくである。

日本研究を行う上で、その対象と方法は様々である。各専門分野は、それぞれ独自の問題意義と方法論を有している。たとえば、個性的記述を基本とするのが歴史学的研究なら、モデルの構築に関心の重点をおくのが社会科学的研究であろう。また、日本を一つの地域として研究対象とする場合、比較の物差しとなる他地域のとりかたで、日本という像の現われ方は当然異なってくる。ヨーロッパと比較した日本、中国と比較した日本、東南アジアと比較した日本、……研究の視点のとりかたにより、日本との共通点と相違点が様々な形で現われてこよう。そこで、時代を近世から現代に絞り、日本の伝統社会から近代社会への移行と変動を共通の話題として、それを各専門分野や各地域から見た意見を提出してもらい、様々な近代日本の像を描き出し、それをどのように総合するかを集中的に討議したい。

シンポジウムは、おのずと収録された問題点——近代化と伝統をめぐる白熱した議論が展開された。専門分野とともに地域による問題意識や事実認識の差異も明らかとなり、あらためて国際集会のもつ意義が確認されたように思う。研究発表者・コメンテーターの方々はもとより、適切な運営に当たられた議長諸氏、ならびに討議に参加された方々に深甚なる敬意と謝意を表わしたい。

またこの国際集会の開催に向けて尽力いただいた教官・事務官にも心から御礼申し上げたい。

村井 康彦